# 12のアップルパイ

筒井康隆・編

集英社文庫

集英社文庫

12のアップルパイ

昭和62年2月25日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

編　者　筒井康隆

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ッ橋2-5-10
〒101
電話　東京（230）6171（販売）
（238）2964（製作）

印　刷　凸版印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©Y. Tsutsui　1987　Printed in Japan

ISBN4-08-749186-7 C0193

集英社文庫

# 12のアップルパイ

集英社版

筒井康隆編「12のアップルパイ」は一九七〇年九月一五日、立風書房より刊行された。

# 目次


遠藤　周作　初春夢の宝船……五
星　新一　はだかの部屋……三一
田辺　聖子　びっくりハウス……五五
五木　寛之　美しきスオミの夏に……八三
北　杜夫　友情……一三一
吉行淳之介　悩ましき土地……一四九
新田　次郎　新婚山行……一六七
生島　治郎　最後の客……一九五
豊田　有恒　地震がいっぱい……二三一


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

野坂　昭如　ああ水中大回天……二六五
筒井　康隆　トラブル……二九三
小松　左京　本邦東西朝縁起覚書……三二九
解説・編輯後記……筒井康隆

# 初春夢の宝船

遠藤周作

読者諸君。

この女は嘘つき、嘘つきでないかを見極める方法を狐狸庵、教示いたそうか。なに、そんなにムツかしい方法じゃないよ。多少の勇気をもてば誰にだって、できることさ。

たとえば、有名な東南アジアの某国大統領の第三夫人を諸君も名を聞いたことがあるでしょう。そうそう。現在、巴里にいかれた方。いい人ですよ。週刊誌など少し、ひどく叩きすぎた気がするがなア。

あの女性としゃべったことがある。写真より、かなり小柄で痩せておられましてな。色々、感銘ふかい話を語って下さった。

「大統領はお休みになる時も、片眼をあけてお眠りになります」

「へえ。片眼を？　義眼じゃ、ないのかなア」

「とんでもありませんわ。あたくしだって気持が悪いので、大統領に両眼をとじて下さいましと申し上げましたら、いいや、私は眠っている時も全世界の半分のことを考えているのである――こう、おっしゃるのですよ」

「ふん、気障な野郎だナ」

「なんですって」

「いえ、なんでもございません。しかし本当ですか。さっきからのお話。余り面白すぎる」

「まア、あたしの今までの話、全部、本当ですわ」

「では、私にあなたが嘘つきか、そうでないか、テストさせて頂きましょう」
「ええ。どうぞ、どうぞ」
「あなたは」
「はい」
「あなたは……お風呂のなかで……おナラをされたことがおありですか」
「えッ」
だが、狐狸庵が感心したのはこの時の彼女の態度であった。一瞬、絶句こそされたが、顔に決意をうかべられ、しかし蚊の鳴くような声で、
「いたしたこと……ございます」
「うーむ。偉い。立派。正直」
膝を叩いて狐狸庵、感心し、自分の非礼を深く深く詫びた次第であった。それ以来、彼女のファンとなり、かりそめにもこの人のことを悪く言うような連中があれば、顔を茹章魚のように真赤にして、口角泡をとばし彼女のために弁解するようになったのである。
しかし、狐狸庵にはこの老齢になるまで小児的と言うか幼稚と言うか、未発達の部分があって、美しい女性がおナラをしたり厠に行ったりするのは（人間である以上、当然と理窟ではわかっても）、どうもあり得ぬことのように感ぜられてならぬのである。友人たちに馬鹿馬鹿しいと笑われるが、どうにも仕方がないのだな。諸君のなかにはそういう方がおられないか。美しい女性がオナラなんかする筈はないと思えばこそ、それを確認したい欲望から前記のようなお恥しい質問を、狐狸庵もあの女性だけでなく、有名な映画女優などにも聞きま

わったわけであるが、しかし女優たちは必ずしも立派ではない。同じ質問にたいしても、かの女性のように正直に答える者は少ない。「あたし、そんなこと、いたしませんわ」などとそっぽを向いて返事をするのである。

今から話すこの物語はな、狐狸庵のように女性にたいして小児的な感覚の持主が主人公である。そして、この話は、諸君のなかには御覧になったかもしれんが、医学者数名が患者の体内にもぐりこみ、病気の部分を手術して、ふたたび体外に脱出という点ではアメリカの奇ばつな科学映画「ミクロの決死圏」に似ていることをあらかじめお許し願っておく。ただし、結末においては大きな開きがある筈である。

一九九〇年の初秋、K大学医学部の若い医者山里凡太郎が柳生教授の回診について病室をまわったあと虚ろな研究室に戻ると、看護婦主任が女性から電話だと伝えてきた。

「もしもし」

こちらにそれとなく耳をとがらせているその看護婦主任に気を使いながら、受話器をとりあげると思いもかけぬ園村小百合の声だった。

「ごめんなさい。今、病院のすぐ前に来ているんですけど、お会いできるかしら」

「どうしたんです。今頃、一体」

「あたし、今日、大学で授業をうけていたら、急に咳こんで口から血が出てきたんです」

小百合の声はオドオドとしていた。

「口から血が出た？　本当ですか」

「ええ。あたし、びっくりして早引けをして、ここまで来たんですけど、兄がいないんです」

園村小百合は同じK大の文学部に通っている女子学生だった。その彼女の兄の園村剛一が凡太郎と共に柳生教授の研究室に属していた。二人は医学部一年の時から知りあった仲だが、気の強い男と気の弱い男とがウマがあうものらしく、いつか親友になっていた。

「待って下さい。すぐ、行きます」

受話器をおいて凡太郎は急いで看護室を出た。小百合に会えると言うことが既に彼の胸をドキドキさせていた。医学部一年の頃、まだ固い蕾（つぼみ）のような女子高校生だった彼女が、最近、園村剛一の家に遊びに行くと、まぶしいほど美しくかがやいて見えた。彼はそんな時、自分のパッとしない顔だちを考え、まるで手の届かぬ宝石でも差しだされたように苦い諦（あきら）めをすぐ感じるのだった。その小百合から自分に電話がかかってきたのである。

外来患者がつめかけている病院の廊下とロビーを駆けぬけて正面玄関までくると、白っぽい服がすぐ眼にうつった。こちらを見たその小さな顔が小鳥のように蒼ざめていた。

「血を吐いたんですって。一体、どのくらいの量です」

「杯の半分ぐらい」

結核（ルンゲ）かな、それとも単純な気管支炎（ブロンシット）かなと、すぐ頭にうかんだ。結核や単純な気管支炎であれば一九九〇年の医学では心配はいらぬ。赤子の手をひねるぐらい治療簡単だ。最悪の場合は肺癌（カンセル）とも考えられるが、この年齢ではまず例外だろう。

「ずっと風邪気味でしたか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ええ、そう言えばこの二日ほど」
じゃあ、心配はいりません。気管支に炎症が起ったのですよ、と凡太郎はわざとあかるい顔をした。
「兄さんに相談するまでもなく、ぼくだって治せますよ。でも念のためレントゲンをとりましょうか」
「兄、どこへ行ったんでしょう」
「おそらく癌センターでしょう。今日は猪口助教授が癌センターに出張される日ですから、そのお供をしているんでしょう」
兄がいないと言うことで小百合は不安そうだったが、凡太郎に言われるままに第三レントゲン室までついてきた。彼は早速、カルテを作成してレントゲン室の岩村に依頼した。しかし向うをむいて、そっとスーツをぬぎはじめた小百合の丸い白い肩がチラッと見えるとあわてて、
「じゃあ、よろしく」
岩村に声をかけて廊下へ出た。日が窓からあかるくさしこみ、外来患者が彼に診察室の場所をたずねた。やがてレントゲンをとりおえた小百合は、乱れた髪に手をやりながら、
「大丈夫でしょうか」
「何言っているんです。大丈夫にきまってますよ。結核だって今じゃあ一昔前のように一年も二年も療養する時代じゃありませんからね。あの頃はストレプトマイシンなんかを有難がって使っていたんです。現在のぼくらは薬なんか使いませんよ。電気放射で患部を焼くんで

すよ。二週間で回復です」
自分がもしこんな可愛いい娘に愛されたらどんなに幸福だろうと思う。しかしそんなことはまず、ありえないことだった。小百合はきっと金持の息子などと結婚するにちがいないのだ。
二十分後、レントゲンが出来あがった。が凡太郎はそれを胸部専門の内科の深沼講師のところに持っていくことにした。彼自身の所見では何の異常も認められない。しかし更に、念を入れてみたかったのである。
「一応見たところでは、小百合さんの胸は、まるで赤坊のそれみたいですね。でも偉い先生に一寸、伺ってきます。ここで待っててて下さい」
小百合は自分の肋骨や肺が露骨にうつしだされているレントゲン写真をみると顔を赤らめてコックリうなずいた。
深沼講師は第一内科研究室で顕微鏡を覗いていたが、凡太郎をみると、
「おう」
と言った。彼は科は違うがこの男らしい先輩が好きだった。
「よし。じゃあ、見てやろう」
「ぼくの眼ではルンゲのキャベルネがありません。ブロンシットにも影はないようですが」
「うん。じゃあ、単純な気管支炎だろう」
電気をつけた判定台を覗きこみながら深沼講師は煙草を口にくわえ、ライターに火をつけた。しかし突然、そのライターを消すと、「おい、待て」と彼は小声で言った。「こりゃ何だ

い。このヘルツのすぐ近くに見えるのは……気にくわんぞ、これは。気にくわんな」
「先生、どれでしょう」
深沼は怯えたような凡太郎の表情をジロッと見て、太い指でそのレントゲンの一個所を指さした。小豆よりもっと小さく、うっかりすると血管の影とも見られる一点である。
「先生、癌（クレブス）でしょうか」
「だと思う。もっとも精密検査の要があるが……」
深沼の所見は当っていた。小百合の精密検査は驚いて駆けつけた兄の剛一や凡太郎の手で行われたが、エッケルマン反応、プラス、電子頭脳による判定、プラス、すべてが心臓と肺の間にある粘膜の癌（クレブス）と診断されたのである。不幸なことにそれは心臓と肺とが接触する近くにあるため、手術上もっとも危険な部分である。一九九〇年になっても癌は未だ外科療法以外はきめ手がなかったのは狐狸庵としても読者にたいし甚だ残念であるが、事実は事実として書くより仕方がない。嘘はつけぬのである。
「小百合さん、気づいているのか」
凡太郎は暗澹（あんたん）とした表情でたずねた。彼としては自分が軽く見ていた所見がこんな重大な結果になるとは思いもしなかった。
「当人には結核と言ってある。妹は医学のことは全く知らないから」園村剛一も顔を強張（こわば）らせてうなずいた。「今、すやすやと病室で眠っているよ」
「危険な手術（オペラチオン）だからなあ。やらせる気か」
「やるより仕方ないじゃないか。親父も説得したよ」

凡太郎はこの部分の手術がどんなに危険なのかを知っていた。このK大では今までこの部分の肺癌は二例しかなかったが、その二例の手術は共に失敗した。患者は手術台で死んだのである。そういう前例を知っているだけに、凡太郎としては妹の生死を思う兄の気持がジーンとわかるのだった。

断っておくが一九九〇年の手術と言うのは現在、読者各位が知っておられるようなものではない。一九八三年にカリフォルニア大学で事物縮小のミクロガンマ光線が発見されてから外科方法では大革命が行われた。カリフォルニア大学のフリードマン博士は、癌を殺す光線の研究をしていたが、偶然、彼がある日、六〇六号目の光線を実験用の二十日鼠にあてて昼飯をくいに行き、研究室に戻ってみると驚くべし、二十日鼠はノミのように小さくなり、それを入れた金網の籠まで大豆のように縮小していたのである。この発見はペニシリンやストマイが発見されて、抗生物質時代という医学界に革命をもたらした一九四〇年代と同じ大変革を医学界にもたらしたのである。

たとえば外科医の場合も現在のように麻酔をかけた患者の体をメスで割き、内臓を切るのではない。この古いやり方だと患者の体にはいかに整形手術を加えようが醜い傷痕が残る。それどころか体を開くために大きな危険を伴う。だが、もし医者が人体の千分の一――ちょうどノミの半分ぐらいに縮小して、患者の人体にもぐりこみ、体内の患部を内側で切りとってまた脱出してくればどうだろう。傷痕一つ残るわけではない。術前と術後と少しも変らぬ五体健全のまま退院できると言うわけだ。

「ミクロの決死圏」という米国映画はこのような空想に基いて作られた映画であるが一九九

〇年、凡太郎の時代にはもはやこれは夢物語でも空想でもなかった。フリードマン博士のミクロガンマ光線は日本の医学界でも縦横に応用され、人体の千分の一に縮小された外科医は同じく縮小された潜水艇にのって患者の体内にもぐりこみ、内部で手術するのが当り前になったのである。

こうして小百合の手術日は十月三日と決定した。手術員は四名、この医学部では癌外科では右に出るものはないと言われている猪口助教授を執刀医として第一助手に平野講師、第二助手に患者の兄の剛一と凡太郎がつくことになった。凡太郎の場合は自分から進んで、

「猪口先生。僕にも参加させて下さい」

と申し出たのだが、それは言うまでもなく小百合へひそかに抱いてきた愛情によるものだった。

「そうか。君もやってくれるのか」

猪口助教授の許しが出たあと、兄の剛一は凡太郎の手を握って感動した面持で礼を言った。

自分が愛している女性の体内にもぐりこむのは奇妙な心理だった。諸君は自分が惚れた女の体に入って、その胃だの心臓だの大腸だのを見物したら面白かんべーと思わないだろうか。凡太郎も今まで外科助手として女性患者の体の中に入ったことが二十回ほどあったが今度ばかりは虚心になれぬ疼(うず)くような感情が毎日、こみあげてくるのであった。

（小百合さんのような美しい女性にも本当に胃があるだろうか。腸があるだろうか）

理窟では当り前のことだが、男の凡太郎の感覚ではそれがあることさえフシギだった。

九月三十日　S・S反応検査、心臓検査

九月三十一日　P・T・A検査

諸君はこれを患者の検査と思うだろうがそうではない。手術をする医者の検査なのである。患者の体内の気圧の変化に耐える体力があるかのテストなのである。凡太郎も剛一も勿論このテストを受け、

「大丈夫です」

と検査室で証明の判をもらった。

十月二日、そんな予備検査をうけた凡太郎が仕事と研究との合間を見て小百合の病室に入ると、彼女はちょうど附添いのおばさんから果物をむいてもらっているところだった。

「いよいよ、明日ですね」

小百合は自分が癌（クレブス）とは知らされていない。結核だと思っている。だから気分的にはそんなに暗くはなかった。

「あたくし、恥ずかしいわ」

「どうしてですか」

「だって、兄や凡太郎さん、あたしの体のなかにおはいりになるんでしょう」

「なにが恥ずかしいことがあるもんですか。三時間、ぐっすり眠ってくだされば、その間にチョコ、チョコとすみますよ」

「まア、チョコ、チョコなんて失礼ね」

しかし凡太郎は窓から差しこむ陽にまぶしそうに眼をしばたたいている小百合の顔を美しいと思った。三十年前に日本映画界に圧倒的な人気があった美人女優、吉永小百合が剛一兄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com